柄谷行人と西田幾多郎（二）

小田桐拓志

0

前節[1]において私は、柄谷と西田の相互批判が、多くの哲学的対話がそうであるように、互いの前提となっている「において」を批判することにつきると述べた。柄谷と西田を読み、柄谷の西田批判を読んでいると、両者の差異よりもむしろ共通点の方がしばしば私の関心を引く。例えばデカルトを論じるとき、両者の思考は対称的な方法を模索しながら、その哲学的関心の所在において奇妙に類似してみえる。

西田と柄谷の思考を通して経験について考えることで、経験の本来の意味を失うことなく、経験を他者性として構成しなおしてみることができないか。本論が最終的に目指すものの一つはそのような認識の可能性であろう。

I　行為と行為者

意識の起原をめぐる柄谷と西田の思考を、デカルトを手がかりにして構成しなおすことができないだろうか。デカルトのコギトに関する認識は鋭利ではあるが、まだ素朴にすぎる。

コギトとは論証されるものではなく、論証そのものであり、論証の根拠となるなにものかである。しかし、論証そのものに根拠を与え意識の存在を明証化するその論証はどのような形式をとっているのであろうか。

（D1）　私は考えている。
（D2）　考えているものはすべて存在していなければならない。
（D3）　それ故、私は存在している。

この論証は、一見自明にしてきわめて明快であるが、実は驚くほど多様な問題をはらんでいる。そのうちの一つの問題点を整理すると次のようになる。

一般に、それがなんであれ行為の存在を行為者の存在に先

だって明言することはできないであろう。デカルトが言っているように、意識する（思考する）という行為以外に、疑いなく私が行なっていると考えてよい行為はなにもない。なぜかというと、私は（あるいは誰であれ）いま歩いているという夢をみているかもしれないし、そもそも私が歩いているということはいくらでも疑いうるからである。ほかならぬ行為者としての私の存在を証明するにあたって、私の行為を私の存在の論拠とすることはできない。私の行為の存在は、私の存在と同時に証明されるしかないはずであるからである。「私は歩いている」という言明は、その行為者としての「私」の存在についての言明をすでに含んでいる。

行為の存在を行為者の存在に先だって考えることはできないが、コギトにおいては、（少なくとも一見すると）前者（思考）が後者（思考者）を証明しているように見える。それ故、コギトの存在証明においては、証明されるべき思考者の存在に関する言明が、思考の存在に関する言明（第一の前提条件）の中に含意されてしまっているように思える。その理由は、一つには、デカルト自身が「私」という一人称代名詞の多義性を十分に把握していなかったからである。この論点をやや詳しく論じよう。

（D1）　私は考えている。

（D3）　それ故、私は存在している。

このとき、「私」という一人称代名詞はどのように機能しているのか。ここで「私」というのは、観察される私という個人という意味（三人称的意味）か。私の手が存在し、私の歩行する足が存在するように、私も考え存在しているという意味か。仮にそうであるなら、「私は考えている」といわれるとき、実際にいわれていることは、「私（という物）が存在し、その私が考えている」ということにはならないだろうか。その場合、第一の前提条件（D1）は、すでに論証以前に論証の結論をすでに含んでいるといえないだろうか。それゆえその場合には、上述の論証は、実際にはなにも証明していないとはいえないだろうか。

私という一人称代名詞を三人称的に理解すると論証の意味が失われてしまうとすると、「私」という語に他にどのような意味（使用法）が可能であろうか。ウィトゲンシュタインは、『青色本』の中で、一人称代名詞「私」には二つの用法があると言っている[2]。一つは今述べたような「客観的」用法であり、そこでは「私」は具体的な三次元的事物を指す名詞類と同じように使用される。もう一つは、「主観的」用法であり、その場合には、一人称代名詞「私」は具体的にはいかなる事物も指示しない。「私は考えている」といわれるとき、あるいは「私

はかくかくしかじかを見ている（聞いている、味わっている）」というとき、これらの文の機能は単に記述的であるよりもむしろ表現的である。

いま私が「私は考えている」というとき、この私の言明は（一人称代名詞「私」の用法に応じて）二通りに解釈できる。私はこの文において、行為者について言及しているのか、あるいは私は行為（の生起）について言及しているのか。前者の場合、私が言っているのは「私の思考を行っているのは、（他の誰でもない）私である」ということである。むろん、その場合には、前述したようにコギトの存在は論証の前提条件であって、しかも結論でもある。それ故、上述の（D1）―（D3）における論証はある種の循環性に陥ってしまうか、あるいはせいぜい些末的な意味で正しい（「AかつBであるということから、Aであると言える」というような）という他はなくなる。さらに言えば、この場合論証の骨子は次のような三人称的な思考の存在証明と全く同一である。

（T1）　彼は考えている。

（T3）　それ故、彼は存在している。

他方、コギトにおける「私」を一人称代名詞の主観的用法にならって考えることも可能であろう。コギトにおいて「私は考えている」といわれるとき、この文は実は行為者についての積極的な言明をなにも含んでおらず、実際には「考えている（思考が行われている）」という言明と同じことをいっているにすぎないのである。それ故、行為と行為者（行為を行なう実体）との関係はコギトにおいては問題とはなりえない。

（A1）　考えている。

（A2）　考えているという事態は考えられていなければならない。

（A3）　それ故、現に考えているという事実が生起している。

一人称代名詞についてのこの第二の解釈によって、上述した論証の循環性の問題はある程度回避することができるが、一方もう一つ別種の問題を生じることになる。

II　自覚（自己意識）と他者

自覚（自己意識　self-consciousness）という事実は、単なる意識（思考）とは本質的に異なっている。私が私の思考について考えるとき、私は単に思考しているのではなく、私が思考するということについて思考しているのでなければならない。そして、このことは意識の表面的特質からは単純に導出

することができない。ある種の霊長類において、われわれが意識と呼ぶものが実際に成立しているとしてみよう。これらの個体において、さまざまな精神活動（とわれわれが呼ぶもの）が成立しているとして、その事自体によって彼らを自己意識的であるということはできない。感覚、知覚から情意にいたるまで、自己意識的な心の働きは意識のさまざまなレベルにおいて機能しているかもしれないが、しかしそのことは自己意識的ではない意識の存在を否定しない。多くの霊長類は意識をもっているであろうと人は考えるが、その同じ意識的動物が「私の存在」について考察し、ましてデカルトと同じ結論に達すると考えるのは難しいであろう。実際、デカルトが懐疑したのは何についてであったか。「私は存在している」という結論が得られる以前には、私の意識の存在もまた懐疑されているが、このことは「私」が私の思考（私の意識活動）や存在を明確に意識することなくなおかつ意識活動を行なうということが可能であることを意味している。

私が「私は考えている」というときには、その発話の状況に応じて、意識（的経験）と自覚という二つの活動が同時に含意されている。「私は考えている」という事実そのものを客観的に解釈すれば、この言明はコギトの思考（意識）についての言明と解釈できる。他方、私が「私は考えている」と考えている（注意している）という反省的側面に注意を向けるならば、コギトは反省的自己意識の問題ともなりうる。「私は考えている」という言明は、現実の状況の中でこのどちらの仕方でも機能しうるのである。即ち換言すれば、実践理性の問題として考えると、コギトは二つの側面をもつ。その一つは意識（「私は考える」）であり、もう一つは自己意識（私の思考についての反省的思考）である。コギトの存在が自明で疑いえないものとして見えてくるためには、意識（思考）のみでは十分ではない。コギトが私の思考についての反省的思考でもある以上、これは当然である。他方、論証的判断の問題として考えた場合、自己意識の側面は消えて、意識という側面のみが表現されてしまう。その場合には即ち、コギトの存在論証にとって「私は考えている」という事実のみが必要な条件なのであって、私がそれについて反省的に思考しているということは問題とはならない。

さらにこれと関連して、もう一つ別のレベルの問題がある。前述したように、「私は考えている」という一人称的言明には、記述的な機能と表現的な機能という二つの異なる文法的機能があり、それに対応する一人称代名詞「私」の用法がそれぞれ客観的用法と主観的用法と呼ばれるものであった。ところがさらにこの二つの用法と表裏をなす自己意識の働きが考えられうる。「私は考えている」というとき、行為者としての「私」を観察可能な私（というもの）と考える自己意識（自覚）

の様式が一つにはありうる。しかし、その場合に、意識者（思考者）の存在は意識（思考）によって証明されえない。というのは、「私は考えている」といわれるときすでに直ちに「私」の存在が問題となってしまうからである（前述I）。他方、この一人称代名詞が表現的に使用されているとすると、「私は存在する」という言明の方がその意味を失うおそれがある。存在するとは観察可能な形で（三人称的に）存在するのであって、表現的な存在の形式などありえないはずであるからである。「考えている」という行為について、存在の有無を問うことはナンセンスでしかない。

一方で意識（思考）と自己意識という二つの側面をあわせもち、他方で多義的な一人称代名詞「私」を含むコギトの第一前提（「私は考えている」）において、もっとも本質的なのは意識（思考）が自己関係的に自身を反省するその思考様式の起源である。「考えているという事態は考えられていなければならない」（A2）というかくれた前提条件は、それ自体が思考の起源についての問いを含意している。すべては考えられていなければならない。しかし、考えているという事態そのものは、それ自体によって含意されえない。それ故、意識（思考）はつねにそれ自身を含意しつつそこから除外される何かを前提とせざるをえないのである。ここから柄谷と西田の個性が別々の方法を模索しはじめる。

Ⅲ　二人称的方法

一人称代名詞の主観的用法における形而上学を追求し、そこから無限の反省作用とその於いてある場所を考察していく西田の方法は、一人称的方法の極限にある。他方、自己意識という前提をきれいに省捨して、客観的事実としての「私は考えている」を問題とするのが自然科学や自然哲学の（あるいは論理学の）（三人称的な）立場であろう。この両者は、意識が意識することと意識が意識されることとの二律背反を、どちらかの方向に徹底した限界の両極をなしている。それでは、これらの二つの立場に対して柄谷の方法とはどのようなものか。

柄谷の問題意識はこの両者のどちらとも明らかに異なっている。柄谷の独創性は、形而上学において従来除外されてきた二人称的な思考様式を意識の哲学の中にもちこもうとしている点にある。形而上学の言語を、客観的な記述としても捉えず、また反省の純粋な作用としても解せず、そこに現に行われている衝突として考えようとすること、あるいは起源を問いつつそれについての明確な座標軸の存在を前提としないこと、それが柄谷の目ざす方法である。

コギトにおいて自己意識を問題とするならば、そのコギトの言語が誰に対して話されているかが同時に問題とならねば

ならない。私が「私は考えている」と現にいうとき、私は誰に対してどのような形でそれを話そうとしているのか。「私は考えている」という言語行為は、同時に「あなたは考えている」という言語行為を含意しているはずである。あなたが考えているが故に、私は考えていると言うことが出来、逆に私が考えているが故に、あなたが考えていると言うことが出来るのである。その場合には、自己意識の側面は、二人称が一人称へと解消される特殊な事例であるにすぎない。逆に言うならば、自己意識が問題となるとき、実は同時に二人称的な思考の衝突が私の意識として内面化されて表現されているのである。反省的な自己省察を内面の世界（当為の世界）へと還元するのではなく、現にそこにあるものとして表現することが可能であるならば、こうした単純化を避けることができるのではないであろうか。自己意識とは、意識の衝突を表現する一つの形態に他ならない。形式の問題として言えば、意識の（内省的）統一とは衝突の形式から逆に構成されたものであり、その意味では二人称が一人称の起源である。

反省という思考形態は、意識の中でどのように可能となるのか。西田にとっては、反省作用ということも「無にして自己に於いて自己を映す自己」という場所に於いてある活動の一つと捉えられる[3]。主客の構図も、判断形式ということも、あるいは意志という形式も、すべてこの無の場所における働きと考えられるわけである。しかし、そのように思考を構成する意識の形式は何に由来するのだろうか。私はこの形式を現にいま行われている言語の活動に負ってはいないだろうか。

Ⅳ

経験を必然性として捉えるとき、意識的経験の多くは自明にして疑いえないものと考えられる。他方、必然性の概念そのものを疑うならば、意識が、現実にいまある多様性として現れてくる。それ故、様相概念と経験性との関連を検討することが、柄谷と西田の両者の思考を考える上での重要な論点となるであろう。

繰りかえすように、経験の本来の意味を失うことなく、経験を他者性として捉えることが、本論が最終的に目指す可能性の一つであろう。いわゆる京都学派と呼ばれる人々の中で、唯一この可能性に気づき、それを模索していたのは、『偶然性の問題』の九鬼であった。経験を偶然性あるいは様相概念から捉えることで、意識的経験に内在する他者性を明るみに出そうとしたのである。それ故、当然九鬼における偶然性の問題は、経験的独我論というかくれた主題と密接に関連しているはずであろう。

註

(1)「柄谷行人と西田幾多郎（一）」『比較文学比較文化論集』十八号（比較文学比較文化研究会、二〇〇一年）

(2) Wittgenstein, Ludwig, *The Blue and Brown Books*, Harper & Row, Publishers, Copyright 1958 by Basil Blackwell First Harper Paperback edition published 1965

尚、同書の該当個所において、ウィトゲンシュタインは、一人称代名詞の記述 description 的使用と表現 expression 的使用の相違について、「痛み」を例にあげて詳しく論じている。

(3)「自ら無にして自己自身を映す鏡」という比喩は、自覚の論理から場所の論理を展開する中期以降の西田において、しばしば登場する。西田は、特に新カント派の認識論を批判して、認識の根底に自覚的な構造を見ようとするのであるが、その際、意識のノエシス的側面の極限を無の鏡という比喩の形で表現している。いま現に所与として与えられている経験をそのまま実在として体得する直観の側面と、それに意味＝価値を付与すると思われる（意識の）反省的側面とを統一的に理解しようとして考察されるのが自覚の体系であるが、自覚が更に広義の実在として観察され直すと意識のノエシスが考察の中心から除外されてしまう。それ故、新たに、自覚の本質は無にして自己を映す自己の鏡として表現し直されるのである。